

---

# 演劇IFストーリー 猫と絆

きらきら星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

演劇IFストーリー 猫と絆

### 【Z-コード】

N6131D

### 【作者名】

きりひり星

### 【あらすじ】

慎也はある日子猫を拾った。その猫は普通の猫ではなかった。猫と暮らすようになつて慎也は少し変わつたりする。

## 第一話 出会い（前書き）

慎也と愛華は同じ名前ですが、演劇団長とは関係ありません。  
短い連載になりますがよろしくお願いします。

## 第一話 出会い

学校帰り外は雨が降っていた。朝はあんなに晴れていたのに水しぶきが見えるほど強い雨が降っていた。

「不味いな

「慎也どうするよ

「コンビニよるか、じゃあな誠」

悪友と別れた俺はコンビニまで走り傘を買い遠回りの帰宅をすることになった。

まつたく、雨なんて嫌いだ。服は濡れるし洗濯物は乾かないからな。

帰り道の途中で愛媛みかんのダンボールを見つけた。

もしやと思ったが思つたとおりだった。中には新聞紙とびしょ濡れになつた子猫が一匹入つていた。

箱の隅の方には給食に出るようなパンが置かれていた。

その横にあるメモを俺は広げた。雨に濡れ読みにくいが要点は分かつた。

『この子達を可愛がってあげてください』だ。

この子達?と中を見るが一匹しかいない。新聞紙の下を見て見たがいない。どうやら他の猫は連れて行かれたようだ。つまりこいつは売れ残りみたいなものか。

「不運だつたなお前

撫でようとしたら噛み付かれた。子猫のくせに威嚇は強く感じさせた。拾われなかつた理由が分かる。

「それじゃあな。いい人に拾われるよ

傘を置いて走つて帰つた。あれだけ強気な猫ならなんとかなるかもと根拠の無いことを思つていた。

「ただいま」

家に帰るが誰もいない。親はそろつて海外で働いている。

俺の世話は親戚の人々に頼んであるそつだが一度も顔を見たことがない。

生活費は大量に送られてくるので生きていくのには困らない。  
よく『大変だね』とか言われるが慣れてしまえばたいしたことない。

唯一困ることは風邪をひいたときぐらいだ。咳をしてもなんとかを聞いて涙が出てきたほどだ。

一人で家事をこなすことはなれている。

てきぱきと夕食を作り始めた。が、メインのパスタが無かつた。  
下準備が済んでいてそれは不味い。渋々パスタを買いに外に出ることにした。

外は雨ではなく雪が降っていた。ここ数年見ていないので少し感動した。

近くの店で目的のものを購入した帰り分かれ道で立ち止まつた。  
真っ直ぐ行けば家なのだが曲がればさつきの猫のいる場所に行く。  
たぶん、いや絶対いる。そんな確信があつて見に行くことにした。

愛媛みかんのダンボールは薄つすらと雪が積もつていた。

置いていつた傘がなくなつていた。

あれならどこかにいつてしまつたかもしれない。

だが、中には白く染まり始めた新聞紙に包まれた子猫がいた。

「まだいたのかよ」

俺はただ立つてそれを見ていた。

死んでしまつたかのようにじつとしている。

小刻みに息をしているのがお腹の動きでわかるだけでそれだけが生きている証拠だった。

「どうして他の所にいかないんだ」

答えることなんて無いがしゃがんでその猫を見ていた。

他の兄弟は連れて行かれたのに自分だけ残されたここには何を考えているんだろう。

哀れみではない。まるで自分を見ているようだ。

「お前も一人なんだよな」

手を伸ばすとやはり噛み付かれた。

だけじさつきより弱弱しく噛み付くところよりしゃぶつているかのようだ。

今にも死んでしまいそうに弱い。

箱の中は白くなつてゆき、こいつの小さな天国となつとしていた。

「たぐ、 しうがねえなあ」

「愛媛みかんの家」ともつて帰ることにした。

## 第一話 出会い（後書き）

ジャンルは恋愛となっていますがとても柔らかくて淡い恋愛なので分かりにくいくらいと思います。

## 第一話 再会

人肌に暖めたタオルで体を擦るとすぐに元気を取り戻した。今度は触つても噛み付いたりはしなかつた。猫の前に暖めたミルクを置くがまつたく飲もうとしなかつた。

「おーい飲まないのかよ」

ミルクに指をつけ差し出してみた。すると匂いを嗅ぐと指を舐めた。それを何度も繰り返して皿を出したが自分で舐めようとはしなかつた。結局全部指で飲ませた。

「一人で飲めるようになろうな」  
頭を撫で俺は寝ることにした。

布団の冷たさは嫌いだ。すると、足元から猫が入ってきた。俺の顔のところまで来て丸くなつて眠り始めた。その時初めてこいつは雌だとわかつた。

「飼うなら名前を決めなきやなあ」

枕元にある写真立てに手を伸ばす。そこには俺と女の子が写っている。思い出の大切な写真だ。

「よし、お前の名前はアイカだ。よろしくな

朝、昨夜雪が降つたせいで寒くて暗い朝だ。幸運なこと学校は休みだ。一人だと時間を好きに使えていいこともある。

寒さに耐えられなくなつた俺は腹の側にいるであろうアイカを引き寄せるために手を伸ばした。が、アイカはいなかつた。布団をめくつてみても毛がついているだけで本人がいなかつた。

こたつの中もテレビの裏も部屋中探したがアイカはいなかつた。

「どこに行つたんだ」

部屋を見渡していると首筋を冷たい風が撫でてきた。白く曇つた窓が少し開いていた。完全に閉めていたはずなのに猫一匹が通れるぐらい開いていた。

「あいつ」

急いで外に出ると地面は薄つすらと氷が張っていた。俺は転ぶことも考えず辺りを探し始めた。

家から出て猫がいそうなところをくまなく探して走った。雪が少し積もっていたがどこにも猫の足跡など無かった。もしかつたのだとしても人間の足跡で消されていた。

分かれ道、ここでした俺の判断がもし違つたらアイカを拾うことは無かつた。それどころかアイカはもう……。嫌な予感が走りアイカのいたところへと走った。

箱があつた場所にアイカはいた。雪の上に座つてただじつとしていた。

アイカの前には小さな女の子とその母親の一人がいた。女の子はアイカに何か与えていたようだがアイカはそれを食べようとしなかつた。俺はそれを遠くから見ていた。

「ママ、猫さん連れて帰つてもいい？」

「どうしましようかねえ」

アイカを連れて帰る。それもありつの生きる道なのだろう。俺に飼われるよりあのこの方がずっと可愛がってくれそうだ。

「お願ひ！」

「わかつたわ、いいわよ。連れて帰つても」

女の子がアイカを抱きかかえる。これでいいんだ。俺は何も言わずここで見送ろう。

熱くなつた。久しぶりに心が熱くて何かが溢れ出そうになつた。

突然、アイカが落とされた。女の子に噛み付いたのだ。

「アイカ！」

無様に地面に落ちたアイカを呼んだ。俺に気付いたアイカは俺の胸の中に飛び込んできた。冷たい。冷たいアイカを強く抱きしめた。

「貴方の猫なの？」

「はい、そうです」

「そう、気をつけなさいね」

泣きじやぐる女の子を連れて母親は帰つていった。

「どうして出て行つたりした。心配したんだぞ」

アイカを強く抱きしめその場に崩れるように座り込んだ。服が濡れるとか人の目がとかそんな物どうでもよかつた。頬にアイカを押し当てアイカの存在を確かめた。

「アイカ、もう俺の前からいなくなつたりしないでくれ」

アイカは熱く流れる俺の気持ちを舐めながら小さな声で鳴いた。

## 第三話 変な猫はどこまでも変だった

ペットショップによつてから家に帰るとアイカはこたつの中に潜つていつた。あそこが暖かいと知つてゐるのか？

俺は何年も使つていない部屋に向つた。俺の部屋の隣にあるその部屋は使われなくなつてからまったく変わつていない。ここだけ時間が止まつてゐるようだ。

その部屋の隅に一度も着られることが無かつた中学の新しい制服がある。馬鹿な奴で入学まで何ヶ月もあつたのに無理言つて買ってもらつたくせに一度も着なかつた。

初めて着るときは俺と一緒に登校する時だとか言つていたつけ。その制服のポケットを探るとあいつのお気に入りだつたりボンと鈴が入つていた。

両方とも俺からの贈り物だ。リボンは誕生日プレゼントだつたが鈴はお祭りの残念賞だつたはずだ。それなのにあいつはこれを毎日身に付けていて大事にしていたな。

「これが丁度いいだろ？」

両方を握り締めアイカのいる自分の部屋へと戻つた。

「おーい、アイカ」

こたつの中からアイカを引きずり出した。嫌がることも無く俺の膝の上で大人しくしてゐた。アイカの首にリボンを通した鈴を結びつけた。

「よし、大切にしろよ」

首にある違和感が気に食わないのか鈴を取ろうとしていた。そのため鈴が鳴り懐かしくなる。この音の後には笑顔があつたんだよな。

「そろそろ飯にするか」

まだ夕飯には早いが俺もアイカも2食続けて抜いてゐる。そろそろお互い限界だ。

ショッピングで色々聞いてきた。まだ子供だと思っていたが人間で言うと俺と同じぐらいの歳らしい。こんなに小さいのは成長が遅いだけだそうだ。店員に進まれるまま購入した猫缶の一つを皿に盛つて前に置いた。その横で俺もカップラーメンをすすっていた。あちこち走ったのにくわえ空腹なので自分で作る気などまったく無かつた。アイカはご飯を目の前にそれに口をつけることなくじつと俺を見ていた。

「どうした、食べればいいぞ」

だが、アイカは食べようとしなかった。空腹のはずなのにおかしい。俺は一口分指に乗せ差し出してみた。すると、すぐにそれを食べた。

「食べられるんだな」

自分の食事に戻る。が、アイカはまた食べようとしなかった。

「まさかお前」

俺はスプーンを持つてきてご飯をすくつて差し出した。すると、さつきと同じで食べ始めた。つまりアイカは……

「俺に食べさせろと」

アイカの食事を済ませてから俺は伸びきったカップラーメンを食べる破目になつた。

その間ずっとアイカは俺の膝の上にいた。

「自分で食べられるようになつてくれよ」

食後、アイカを撫でていると手に砂が着いた。長い間外にいたんだ、汚れていて当然か。

「風呂に入るか」

猫は水を嫌うと言つうそつだがアイカは違つた。俺が先に入つてこうと思つたがそこにアイカが飛び込んできたのだ。首だけを出して俺を見ていた。

「風呂好きなのか」

経験したことが無いからだろつか水をまったく脅えていない。こつちは楽だから良いけど。

「アイカ、逃げるな」

言つて通じる訳でもなく俺はアイカを部屋中追いかけた。俺はタオルとドライヤーを持ってアイカを部屋の隅まで追い込んだ。

久しぶりにアイカの威嚇を見た。俺は可愛い威嚇に屈することなくタオルを使ってアイカを包み込んだ。

「手間かけさせやがつて」

タオルで拭きながらドライヤーをかけてやつた。暴れるアイカを足で挟み込みなんとかドライヤーをかけ終わつた。水は大丈夫だけビードライヤーは駄目なのか。

「どつと疲れた。もう寝よう」

布団にもぐりこむとアイカも入つてきた。昨夜と同じ場所で俺から見えるところにわざと丸くなつているようだ。猫ならもつと奥に入つていくと思うのだがアイカは枕に近い所に居る。

「お前つてかわってるよな」

問いかけても答えてくれるわけではない。

「お前が人間だつたら話できるのにな」

そんなことをぼやきながら俺は深い眠りについた。

遮光カーテンの隙間から朝日が入つてくる。昨日と同じく今日も学校は休みだ。週休一日制万歳。俺はカーテンを開け朝日を浴びた。それでもまだ睡魔が残つてるので休日の醍醐味一度寝をしようつと布団に戻つた。

昨日より他の温もりを感じアイカの存在が確かめられた。だが、その温もりは猫の大きさをはるかに超える大きさだった。

「アイカ?……」

寝ぼけた目を擦ると田の前には同じ歳ぐらいの女の子が寝ていた。

誰だ?見たことない子だな……

そのまままた眠りにつこうと……

「つて、お前誰だよ」

布団をどけその子を良く見た。が、すぐに田を背けた。その子は何も着ていなかつたのだ。

布団の真中で丸くなつて寝ていたその子が目を擦りながら田を覚ました。

目覚めての第一声に俺は自分の過去を疑つた。

「おはよづ。パパ」

パパ？いつから俺は父親に？それにどう見ても歳が合わないだろうが。

「そうじやないなあ。うへん、兄さん？」

こめかみを押さえながら考えている女の子にタオルを投げて背を向けた。

「とにかく、体を隠せ、なんで裸なんだよ」

「？変な兄さん」

タオルを頭からかぶつたその子の首には見慣れたりボンと鈴がついていた。

「まさか、アイカか？」

「やっぱり分かつてなかつたんだ。そうだよ、アイカだよ～」

猫のときのように俺に飛びついてきた。自分の格好をまったく気にせず俺に抱きついてきたアイカに俺は焦りを隠せなかつた。

## 第四話 猫と人間の違い

落ち着いて考えてみよう。俺は猫を拾つた。そしたらその猫が女の子になつていた。以上。

意味が分からん。どこで人間になる条件を満たしていたんだ。助けたから?つまりこれは鶴の恩返し的なもの。しかしあは機織りをして稼がなければならぬほど貧しくは無い。

いや、嬉しいのかと聞かれれば嬉しいに決まっている。可愛いし、俺になついているし、すっぽり甘えてくる。ただ、女の子だと言うことだけで猫のアイカと変わりない。

「兄さんどうしたの?」

頭を撫でると気持ちよさそうな顔をする。残念ながら耳は生えていない。外見は普通の女の子だ。

「とりあえずだな」

「なあにい?」

「どいてくれないか」

アイカはずつと膝の上に座つていた。本人はいつもと同じことをしているつもりだろうが非常に重く、いや、女性を重いと言つては失礼か。それ以上に今のアイカは何も着ていなくて……

「うう~、分かったあ」

アイカは布団の上に座つた。俺は慌てて隣の部屋へ走つた。入るなり目に入った服を取つて戻つた。手に持つたのは一度も着られたことのない服だ。

「これを着ろ」

アイカに渡すが首を傾げて俺を見ていた。

「服?兄さん着させて」

こいつ、服を知ってるのか。

自分で着れないのか

「うん。だ・か・ら」

両手を広げて着せると主張していた。俺はため息を吐き田を開じながら服を着えた。

中学校の制服だがアイカにぴったりなサイズだった。

リボンの時とは違った氣に入っているようだ。

「ようやく一息つけたか」

「兄さん。いきなりどうして服なんて着させてくれたの？」

手櫛で髪を整えていた。猫で言う毛繕いのようなものか。

「裸だつたんだからあたりまえだろうが」

「昨日と同じで私はいいんだけどな」

「お前がよくても俺が駄目なんだ」

「兄さん」

「なんだ」

「お腹空いた」

俺はキッチンで朝食と昼食を兼用した食事を作り上げた。が、問題はあいつだ。俺の前には猫缶と人間用の食事を一人分用意している。体は人間なんだから人間用の食事なのだろうか。

「兄さん。ご飯まだあ」

我慢ができなかつたのかアイカが直接出向いた。アイカはテープルの上を見るなり猫缶を持つてキッチンを出て行つた。

「先に戻つてるね」

そつちでよかつたのか。俺は大目の食事を持つて戻ることにした。

部屋に戻るとアイカは猫缶とスプーンを皿の前に置き口タツでくつろいでいた。

アイカの向かいに入るなり猫缶とスプーンを渡された。

「兄さん。あくん」

アイカは大きく口を開けて待っていた。

「いいかげん自分で食べろ」

猫缶とスプーンをアイカに押し返した。

「むう～」

頬を膨らませアイカは手で食べ始めた。口を直接持つていかないのは人間らしいが口や手が汚れるのを気にせず食べているのは同じ年齢の子にはみえなかつた。まるで生まれたての子供のようだ。

「お前本当に猫」

猫缶を食べ終わつたアイカは手を舐めて口を拭つていた。俺は質問をそこで辞めた。この動きは猫そのものだ。

「むう～」

「お前どうして人間の姿になつたんだ」

アイカは口先を尖らせそっぽを向いてしまつた。顔は相当不機嫌そうだ。

「どうしたんだよ」

「名前…」

「はあ？」

「アイカって呼んでくれなきゃ 答えない」

そんなことに腹を立てていたのか。そう言われれば人間のアイカを見てからずつとお前つて呼んでいたようなきがするな。

「分かつたよ。アイカ、どうして人間の姿なんだ」

満面の笑みを見せ俺に近づき抱きついてきた。下から見上げるアイカの目が可愛く見惚れるものだつた。

「あのね。年頃の猫には良くあることなの」

俺はペットを飼つたことが無いがそれは絶対に嘘だとわかる。

「嘘つきは夕飯抜きだぞ」

「だつてえ、アイカにも分からんなんだもん。猫の姿にも戻れるみたいだけど」

アイカはコタツに潜り込んだ。そして出てきたのは猫のアイカだつた。こたつの中を見てみると制服だけが残されていた。

またアイカがコタツに戻ると人間のアイカが出てきた。

「ね、凄いでしょ、つてうえあわ」

俺は制服をアイカに投げつけた。こいつ、見た目は人間のくせに

頭は猫のままなのか。

「いいから服を着ろ！」

「だ、か、ら、一人では無理だつて」

こんな緩い午後を俺達は過した。残された時間が少ないとも知らずに。

夜、湯船でようやく一人安らぐ時間を堪能していた。ぬるめのお湯につかりながら疲れが取れることも無かつた休みを振り返つていた。アイカを拾つて疲れることがばかりだつたけど退屈はしなかつた。後悔はしていない。それでいいではないか。

「明日から学校か……」

アイカの奴一人で大丈夫だろつか。もしかしたらついてくるかもな。俺は微笑みながら頭までお湯につかった。

「兄さん。アイカも入る！」

曇りガラスの奥で肌色の何かがモゾモゾ動いているのが分かる。着ることすらできない服を無理矢理脱ごうとしているのだ。

「ま、待て。俺はもう出るから」

最小限を隠して慌てて出ると中途半端になつたアイカがいた。俺は急いで自分の部屋へ戻つた。

「あ、兄さん待つてよ」

俺はアイカ用のパジャマと布団を準備して待つていた。数分後、制服を着たアイカが戻ってきた。どうやら一人で着ることができたようだ。

「ほら、パジャマ、これに着替えるんだ」

パジャマを持って俺に微笑んできた。

「兄さん。きがえ」

自分で着替えられるんだ。自分でするんだ

明かりを消してアイカに背を向け布団にもぐりこんだ。後ろで布のするる音がする。

俺が眠りにつけそうになつた頃、冷たい風が入ってきて暖かいものが背中に当たつた。

振り返ると笑顔のアイカが俺の布団の中に入ってきた。

「えへへ、兄さん」

その無邪氣で可愛い笑顔に俺の籠は音を立てて壊れた。

「いい加減にしろ！」

立ち上がつた俺は何が起きたのか分からずポカーンとしているアイカの顔を睨みつけていた。

月明かりだけが俺達を照らしていた。

「に、兄さん？」

俺の裾をつかもうとする手を払いのける。ここまでではつきりとアイ力を拒んだのは初めてだ。アイカも叩かれた手を撫でながら俺を潤んだ瞳で見ていた。

「俺はお前の兄なんかじゃねえ」

俺の大声にアイカは震えていた。それを見ても俺は止まることができなかつた。

「俺のことを見と呼んでいいのはな、いもうと愛華だけなんだよ」

アイカは俯いていたがそこまで言ってアイカが話し始めた。

「この姿になつてからアイカに触れてくれなくなつた。ご飯も、お風呂も、寝るのも一人でつて、前みたいにぎゅつて抱きしめてくれなくなつた」

涙をぽろぽろ流しながら訴えてきた。アイカが今まで我慢したこと、して欲しかつたことを次々と言い出した。そして、一息置いて一番大きな声で一番思つていたことを叫んだ。

「こんなことになるなら人間の姿になるんじゃなかつた！」

窓を開け放ち雪の降る中アイカは外に出て行つた。

「アイカ！」

俺もそれを追いかけて外に出た。

雪の積もった分かれ道、足跡があの場所へと続いていた。俺は追いかけるかどうか一瞬悩んだ。アイカはただの猫だ。それなのにここまで必死になつて追いかける必要があるのか。どうせ腹が減つたら帰つてくる。根拠の無い考えが俺の足を家の方へと変えようとした。

帰らうとする俺の考えを押さえ昔の記憶が戻つてきた。そうだ俺はここでアイカなら一人で大丈夫だと思っていた。だけど実際は俺が助けなければアイカは死んでいたかもしれない。

そう思つと見に行くだけいつてみよつと思つた。

やつぱりアイカは捨てられていた場所に座り込んでいた。冬用の征服には薄く雪が積もつてアイカの吐く息は白く時折震えていた。

「こんなに冷たくなつて」

マフラーをアイカの首に巻いて隣に座つた。アイカは一度俺の顔を見たが遠くを見ているように田線を外した。

「さつきは言い過ぎたごめん」

まつたく俺の顔を見ようとしてくれない。相当怒つているんだな。「本当の兄さんじゃないつて嫌つてほど分かつてた」

顔は見てくれない。ただ話だけをしてくれた。

「アイカ達は生まれてすぐに捨てられたんじゃないの。短い間だけみんなで暮らしてた。でもね、急にみんなそろつてここに捨てられたの。でも、兄さんや姉さんがいたから、アイカは怖くなかった。だけど、兄さんや姉さんが連れて行かれてアイカ一人になつて寂しくて怖かった。ずっと一緒にいようつて約束したのにみんななくなつて……」

声を上げながら泣いているアイカの手を握つた。冷たく細い手だつたが決して離したくないと思う気持ちが握る力を強くした。

「迎えに来るつて、約束もしたのに、誰も来てくれなくて…」

だからか、アイカが何があるとここにいたのは。連れて行かれそうになると噛み付いて拒んでいたのはその約束があつたからか。

「怒られた時、もう誰もアイカに優しくしてくれないって思つて怖くなつて」

アイカの瞳は恐怖と悲しみが溢れていて誰でもいいからすがりつきたいと叫んではいるようだ。

「もう、一人になるのはいや！」

強くアイカを抱きしめた。アイカも俺に抱きつきながら泣き続けた。

「大丈夫だ。もう一人にさせない。ずっと俺が一緒にいてやる」

「ほ、本当？」

「ああ、俺がアイカの兄貴になつてやる  
「に、兄さん」

手を繋いで家へ帰る途中、高校生ぐらいだろうか男女5人ほどの集まりがこちらへ歩いてきた。

その団体が見えた途端アイカが歩くのをやめ立ち止まつた。

「どうしたんだ」

団体の中から一人の男がこちらに来た。見たこと無い顔だ。

男はいきなりアイカの頭を撫でた。馴れ馴れしい奴を通り越して失礼な奴だ。

だがアイカは顔を伏せていた。その横顔は頬を赤くして喜んでいるようにも見えた。

「ちゃんと迎えに來たぞ」

迎えに？まさかこいつら

「兄さん」

アイカに呼ばれたのは俺ではない。目の前の男だ。

「貴方が妹の飼い主ですか」

男は暗い顔をして後ろを振り向いた。他の兄妹は頷いて答えた。

「これからも妹をよろしくお願ひします」

「深く頭を下げた男はアイカを置いて帰るのとした。

「兄さん。これからどうするの」

「なーに、暖かい場所を探してみんなで暮らすぞ」

「飼い主の所には帰らないの?」

「みんな、帰りたい家じゃなかつたからな」

「帰りたくない家、馴染めなかつたのかそれとも……」

「お前のご主人はいい人みたいだな」

最後にアイカの頭を撫でて俺達から離れていった。

「あ、あ、うう」

俺と去つて行く兄の背中を交互に見ながらアイカは戸惑っていた。

繋いでいた手を離しアイカの背中を押した。

アイカを受け取つた本当の兄は俺を見て全て分かつていていたようだ。

「兄さん?」

アイカは俺の顔を見て驚いていた。そして、アイカも察したのか泣き出しそうになつた。

「泣くな!家族と仲良く暮らすんだぞ」「に、兄さん」

暴れるアイカを兄が抑えてくれている。助かつた。もし、近づかれたら俺の気持ちが変わつてしまつ。

「アイカを…俺の妹をよろしくお願ひします…」

「兄さん!」

走つた。少しでも早くアイカから離れたくて。

アイカが俺を呼ぶ叫びが頭の中で響いて木霊していた。

次の日、眠れず朝を迎えた。布団の中には一人分の温もりだけ、朝日が時の流れを知らせいつもの生活が戻ってきた。

まだ心のどこかに引っかかる何かが取れなくて外に出た。白い世界を朝日が照らし晴れ渡つた美しい朝が目の前に広がっていた。

その白い世界の一点に輝く鈴とリボンがあつた。

鈴とリボン。これにまたアイカの思い出が増えたなと思いながら携帯を取り出した。

「ああ、親父。……あのさ、来月帰つて来られるかな。……その愛華の命日、三人で墓参りに行かないか」

## 最終話 妹（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回のテーマは『暖かい恋』です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6131d/>

演劇IFストーリー 猫と絆

2010年10月8日15時49分発行